



リングス代表

前田日明

“犬死”も“名誉の死”もない
死ぬときは死ぬ。余計なことは考えない
それが武士道!

取材・構成／山口日昇

『大武道!』によいよこのお方が満を持して登場! 話を聞きにいった『大武道!』編集長2号の山口日昇とは、25年以上前から幾多のインタビューや対談等を重ねてきた仲ですが(途中、諸事情により空白期間あり)、今回は会話形式ではなく、敢えて突っ込み、茶々入れ、キャラ設定なしで、素の日明兄さんの「死生観」を、ひとり語りの形式で収録してみました。日明兄さんの死生観を姿勢を正して聞け!

裏を返せば、カッコいい死に方を
したときに、周りが考えるのは、
その人の生き方だということですよ

ああ、カッコいい死に方だなあと思うのは山岡鉄舟の最後だね。
ある日、勝海舟のところに山岡鉄舟の門人がやって来て、「山岡先生が勝先生に、御挨拶をしたいそうです」って言うから、何ごとかと思っ行って行ってみたら、山岡鉄舟が白装束で結跏趺坐(けっかふざ)をして、周りを弟子が囲んでる。で、勝海舟が「どうです先生、御臨終ですか?」って言ったら、山岡鉄舟は「さて、先生よくおいで下さった、ただいまより涅槃に入るところでござる」とひと言。
それを聞いた勝海舟がどうしたかっていうと、「よろしく、ご成仏あられよ」って言って帰ってしまった。
それでしばらくして山岡鉄舟が死んだって聞いた。
カッコいいでしょ?

新選組の斎藤一もそうだよ。維新後、藤田五郎を名乗り、警視庁抜刀隊で西南の役に参加後、警察の職務を全うし、隠居後家族に見守られながら、正座したまま死んだから。
死ぬってわかっているのにジタバタするのはカッコ悪い。でも、諦めっていうのとも違うんだよね。
突き詰めたら、カッコいい死に方なんてないと思うよ。カッコいいもカッコ悪いもなく、死ぬときは死ぬんですよ。

「武士道と云ふは死ぬことと見つけたり」で有名な『葉隠』を書いた山本常朝。その山本常朝の師匠の石田一鼎が書いた書物もあるんですよ。
それを読むと、ああ、この人がこうやって山本常朝にいろいろ教えたのか、っていうのがわかる。その師